

平城宮跡第104次発掘調査現地説明会資料

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

1977年10月8日

調査期間 1977年8月4日～10月末日 発掘面積 約2700㎡

調査地区 平城宮東院地区西辺部

調査目的 東院地区西辺部については、昭和39年の第22次北の発掘調査を契機にして昭和43年まで4個所の地区を調査した。その結果、東一坊大路の道路敷を想定していた位置には、予想に反して大路の痕跡は明らかでなく、大路推定地上に多くの遺構を検出し、宮城内の施設が更に東へ張り出している事実を知った。この拡張時期を大体奈良時代前期と想定しているがその詳細は明らかでない。今回の調査目的は、宮内官衙に関係した建物がこの地に作られるようになった時期はいつか、大路そのものの存在はどうか、東院西辺地区の性格はどのようなものであったのかといった点をより一層明らかにすることにある。

検出遺構 この地域は、第2次朝堂院地区と東院地区の間に存在する谷筋にあたる低湿地である。現在調査中だが、検出したおもな遺構は、掘立柱建物13棟、柱塀9条、溝13条、盲暗渠4条、長方形の土塋1個所などである。これらの遺構を大きく5期に分け、古い順にA期、B期、C期、D期、E期とする。A期の遺構は、両岸に護岸施設としてしがらみを施した斜行溝や長方形の土塋などの他には、きわめて遺構の少ない時期である。斜行溝・土塋の埋土から造宮当初と思われる和銅年間の木簡が数点出土している。栗石盲暗渠（遺構番号1～4）、玉石南北溝(5)、素掘り東西溝(6)、斜行溝(7)、長方形土塋(8)、南北棟3間×4間(9)、素掘り南北溝(10)。B期はA期の斜行溝と土塋を埋め立てて、整地した後柱塀でこの地域を区画した時期である。柱掘形の埋土と整地土に灰白色粘土を使用している点、建物の数がまだ少ない点が特徴である。南北塀32間(11)、南北棟2間×8間以上(12)、東西塀7間以上(13)、東西塀7間以上(14)、南北塀5間(15)、南北塀(16)、東西塀(17)、素掘り東西溝(33)、素掘り南北溝(34)。C期は、大規模な改修工事がなされ、以前の状況とは全く別種の遺構となる。いずれも南廂付きの東西棟の建物6棟が南北に整然と配置され、官衙的に整った様相をおびてくる。東西棟5間×3間(18～23)、東西塀6間以上(24)、素掘り南北溝(25)。D期は、2度の改修を行なっている南北溝、これに注ぎ込む玉石敷溝が作られており、この地区の計画的な排水施設が整った時期である。南北溝の堆積土中より多量の土器・木簡等が出土した。これらの遺物は奈良時代後期の特色を示す。南北溝(26)、総柱の南北棟3間×7間(27)、東西玉石溝(28)、東廂付南北棟5間×3間(29)、東西玉石溝(30)、南北棟6間×2間(31)、素掘り東西溝(32)、素掘り南北溝

(35)、北廂付東西棟5間×3間(36)、東西塀5間以上(37)、南廂付東西棟3間×3間(38)、東西塀5間以上(39)。E期はこれらの遺構を全面バラスで覆った時期でバラスと共存する遺構は少ない。平安時代の遺構と考えられる。

出土遺物 土器では顕著なものとして、二彩鉄鉢片、土馬、墨書土器、漆を塗布した土器などがあり、多くは遺構番号26の素掘り南北溝より出土した。いずれも奈良時代後半の遺物である。瓦埴類には、小型緑釉埴、緑釉平瓦片、鬼瓦、軒瓦、刻印瓦などがある。木製品は、曲物、箸、櫛、糸巻、木皿、琴柱などがある。金属製品では、鉄釘、和同開珎、万年通宝などが出土した。木簡は、斜行溝からは「和銅七年十月」、(表)「丹波国多紀郡真継里」(裏)「多紀臣大足三斗并一俵和銅五年」、南北溝からは「舎人監解……」、「天平神護二年正月」、「木工并仕丁粮」(題籤)などが出土した。

成果 今回の調査において特徴的な成果は、東院地区の西辺における遺構の変遷を経年的にたどりえたことである。斜行溝を中心とする初期の遺構から官衙区画を形成する盛期の遺構への変化など、平城宮内における土地利用の様相を明確にしており、ひいては東院地区の盛衰をたどる重要な手掛りをえたといえよう。個々の性格についてはまだ検討中である。一方、今回の調査においても東一坊大路の痕跡は検出できず、すくなくとも和銅年間においては道路の機能を果していないことが明らかになった。したがって現状の水田地形は、奈良時代以降の地割りを示すことになり、平安時代のある時期に東院地区が分断された可能性を秘めているようである。



